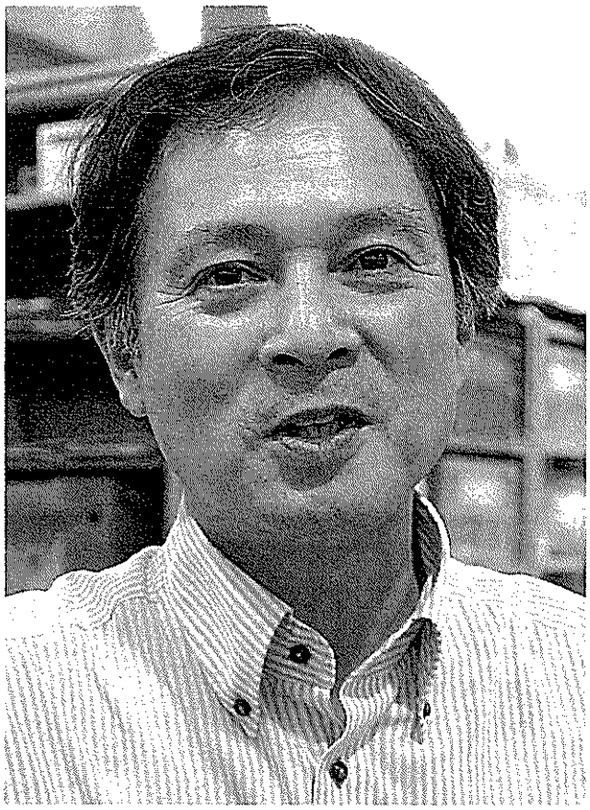
オピニオン

生活を豊かにする選択肢

川上浩司・京都大特定教授

「不便」のいいところ



24時間営業のコンビニや飲食店が当たり前になり、ネット通販を利用すればほとんどの品がすぐに届く。便利な世の中になったと思う半面、何かゆとりを失ったような気持ちにもなる。便利さの追求から一歩引き、あえて不便のいいところに着目する研究が注目されている。「不便益」というテーマに取り組んでいる京都大の川上浩司特定教授(53)に聞いた。

（論説委員・古川竜彦、写真も）

―不便益とは聞き慣れない言葉ですね。

「不」＋「便益」ではなく、不便によってもたらされる利益や効用といった意味で使っています。もともとは20年ほど前に恩師が考案した造語です。例えばオートマチック車は便利ですが、マニュアル車の方が運転している実感があって楽しいと喜ぶ人もいます。鉛筆削り器を使うよりナイフを使った方が面白く、達成感を得られることもあるでしょう。いずれも不便な道具を使うことでもたらされるプラスの効果で、不便益といえます。

―「便利だからいい」というわけではないんですね。

高性能になったカーナビが普及し、行き先を入力すれば現在地から目的地までの経路や所要時間まで何でも親切に教えてくれるようになりました。地図を見る手間が省け、どうすれば最短、最速でたどり着けるか考える必要もなくなりました。

ただ道を覚えられなくなったと感じている人は多いはずです。自分がどこを走っているかより、ナビにきちんと従っているかどうかの方が重要になっているからです。沿道の風景の記憶さえ、曖昧になる場合もあります。

―便利さと引き換えに失われているものもあるのですね。

旅であれば、道に迷ったり予期せぬ場所や店に出くわしたりする体験が醍醐味の一つでしょう。苦労という不便を味わった方が、思い出深い旅になる場合もあります。そんな視点から、ナビにあえて不便さを持ち込んだ「かすれるナビ」を研究者仲間と開発しました。通った道が地図上からかすれていって、3回通ると真っ白になる仕掛けです。道や風景はしっかり頭に入ってきます。使い込めばどんどんかすれ、他人には使いづらい自分だけの特別なナビになります。

―不便がいいと持ち上げると、誤解を生みませんか。

便利な暮らしそのものを否定するわけではありません。何でも不便にすればいいとも、昔に戻れという懐古趣味でもありません。ただ便利にも不便にも、いいものと悪いものがあると考えています。いろんな事例を分析して分類することが研究課題の一つです。一見不便に見えることに、ちょっとだけ暮らしを豊かにするヒントがあるかもしれません。それを見つけ出していきたいと思っています。

―「悪い」便利とは。

手間を省くとか、頭を使わないで済む便利さだけを追求していては駄目なんだと思います。スマートフォンやパソコンばかり使っていると、簡単な漢字さえ書き方を忘れることがあります。便利の害といえます。漢字を覚えるには、自分の手で書く手間を掛けるのが一番です。

―だからといって、便利なスマホを手放す人は少ないでしょう。漢字を書けなくても問題ないと感じる人もいるはずです。

気を付けたいのは、便利さも不便さも人それぞれ感じ方が違うことです。不便益という考え方は選択肢の一つであり、無理強いをしないのが基本です。「便利だったらいいじゃない」と見過ごされてきた大切なものがあるかもしれません。ちょっと立ち止まって今の暮らしの在り方を考え直すきっかけになれば、と考えています。

―何を目指すのですか。

どの分野にどんな不便益があるかを確認し、豊かな生活につながるような不便益を生むシステム論の構築を目指しています。地方の自治体や商店街から「うちの町は不便なんですよ。この不便が何か益になりませんか」という相談を受けることがよくあります。町の見方をこんなふうに変えると住民の意識がこう変わりますよとか、その町ならではのビジネスを展開できますね、と解決策を語れるところまでいきたいと思っています。

かわかみ・ひろし　出雲市生まれ。89年京都大大学院工学研究科修了。同大学院情報学研究科准教授などを経て、14年から京都大デザイン学ユニット特定教授。専門はシステムデザイン。研究者らでつくる「不便益システム研究所」代表も務める。著書に「不便から生まれるデザイン」「不便益という発想」など。